



正しい核戦略とは何か

冷戦後アメリカの模索
ブラッド・ロバーツ・著
村野将・監訳
勁草書房 / 4950円

**どうする米国の核戦略
激動の安保状況で考える**

米国の核兵器は冷戦時代の遺物なのか。それとも安全保障に重要かつ代替不可能なものなのか。米国の国防戦略や安全保障環境が変化し、核運搬手段の更新が必要な今、この議論を進めるべきだ。本書はオバマ政権で核・ミサイル防衛政策担当の国防次官補代理として二〇一〇年の核態勢見直しを主導した著者が、現在の安全保障環境のもと米国に必要な核能力の選択肢を論じ、核軍縮・核抑止の垣根を超えた議論の土台を作ることを目指す。



アフガニスタン・ペーパーズ

隠蔽された真実、欺かれた勝利
クレイグ・ウィットロック・著
河野純治・訳
岩波書店 / 3960円

**内部文書が雄弁に語る
アフガニスタン戦争
の実態**

米国史上最長の戦争は、なぜするずると続いたのか。著者はワシントン・ポストが連邦訴訟を経て勝ち取った膨大な内部文書や政府高官四百数十人へのインタビュー記録から、作戦の混迷や情報の隠蔽の様子を緻密に描き出した。米軍は誰が敵なのか、達成すべき目標は何かを、当初から見失っていた。数字の操作や調査の中止など隠蔽と不作為の連続により多くの人命と資金を費した戦争で、何が起きていたのか。内部文書は率直に語る。

**冷戦が進めた
世界の開発競争**



グローバル開発史

もう一つの冷戦史
ブラッド・ロバーツ・著
三須拓也 / 山本健・訳
名古屋大学出版会 / 3740円

貧困にあえぐ国が存在する世界で、解決策として提唱されるのが「開発」だ。開発が地球規模で取り組まれる過程には、冷戦が密接に関連していた。グローバル・ヒストリーたる本書の視野は、米ソ超大国と異なる独自の援助構想を持った欧州、自らに有利な援助を引き出そうとする途上国、普遍的な開発概念を打ち出そうとした国際機関にまで及ぶ。未来志向のSDGsが一世を風靡するいま、改めて開発の歴史を振り返りたい。



犠牲者意識ナショナリズム

国境を超える「記憶」の戦争

林志弦・著

澤田克己・訳

東洋経済新報社 / 3520 円

「犠牲者たちの争い」は冷戦終結から始まった

冷戦後、欧州と東アジアでなぜ歴史認識が紛争化したのか。本書は韓国、日本、ドイツ、ポーランド、イスラエルの事例を分析し、戦争や抑圧に対するさまざまな記憶が地球規模で交錯し、各国民が「犠牲者」としての自己認識を強めて、その地位をめぐる民族主義的な競争につながったと論じる。加害国／被害国の二分法を超えて過去の加害への責任を冷静に考察する著者の姿勢は、今後日本が、安定した対外関係をつくる指針となろう。

良心的戦争拒否者は市民責任の倫理を問う



戦争抵抗の倫理

大戦期アメリカの良心的戦争拒否者たち

師井勇一・著

大月書店 / 3520 円

二〇世紀の世界大戦の時代に、兵役などの戦争参加を拒否した米国の若者たちは、「公共」の義務を果たさない「自己中心的」な存在だったのか。膨大な史料に基づく本書は、その抵抗の根拠が自らの宗教的・平和主義的な信念の倫理のみならず、社会全体のあり方を問う市民責任の倫理にも及んでいたことを示す。彼らが内包した二つの倫理の相互作用は、現代もなお、公共領域における市民としての課題をも浮き彫りにしている。

日本の国際報道は何を伝えていのか

国際報道を問いなオス

ウクライナ戦争とメディアの使命

杉田弘毅・著

ちくま新書 / 880 円



日本の国際報道の特徴は何か。どのように日本社会に受容されたのか。本書はベトナム戦争に遡って歴史を振り返り、各国ジャーナリズム事情やジャーナリズムの倫理性の違いを比較し、ウクライナ侵攻を予見できなかった報道の限界にまで議論は展開する。ジャーナリストである著者の自分史を重ねることで、国際報道のあり方を真摯に考察するのみならず、戦後世界の国際問題をも振り返ることができる点も魅力の一つである。